

テヅカ・イズ・デッド

ひらかれたマンガ表現論へ

伊藤剛

53



SEIKAISHA
SHINSHO

星海社

53



SEIKAISHA
SHINSHO

テヅカ・イズ・デッド——ひらかれたマンガ表現論へ

伊藤剛

テヅカ・イズ・デッド — ひらかれたマンガ表現論へ

二〇一四年九月二五日 第一刷発行

著者

伊藤剛

©Go Iho 2014

発行者

杉原幹之助・太田克史

編集担当

平林緑萌

アートディレクター
デザインアシスタント
フォントディレクター
校 閲

吉岡秀典 (セブテンバーカウボーイ)
榎本美香
紺野慎一
鷗来堂

発行所

株式会社星海社

〒一〇二・〇〇一三

東京都文京区音羽二・一七・一四 音羽YKビル四階

電話 〇三・六九〇二・一七三〇

FAX 〇三・六九〇二・一七三三

<http://www.seikaisha.co.jp/>

発売元

株式会社講談社

〒一〇二・八〇〇一

東京都文京区音羽二・一七・二二

(販売部) 〇三・五三九五・五八一七

(業務部) 〇三・五三九五・三六一五

印刷所

凸版印刷株式会社

製本所

株式会社国宝社

●落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、講談社業務部あてにお送り下さい。送料負担にてお取り替え致します。なお、この本についてのお問い合わせは、星海社あてにお願い致します。●本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。●本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。●定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-06-138556-6

Printed in Japan

53



SEIKAISHA
SHINSHO

目次

まえがき 3

第一章 変化するマンガ、機能しないマンガ言説 15

- 一 一 なぜマンガ言説は、現状に対応できないのか？ 16
- 一 二 「読み」の多様さとシステム論的分析の必要性 23
- 一 三 マーケット分類とジャンル分類のあいだ 28
- 一 四 『少年ガンガン』に見る言説の断絶 34
- 一 五 誰が子供マンガを「殺した」のか 39
- 一 六 キャラクター表現空間のなかで 45

第二章 切断線を超えるもの——いがらしみきお『ぼのぼの』の実践 55

二一 いがらしみきおの認識 56

二二 『ぼのぼの』と『動物化するポストモダン』 66

二三 「切断線」としての『ぼのぼの』 75

二四 「切断線」はどのように見いだされたか——マンガ表現をシステムとして見る 85

第二章 章末註 105

第三章 「キャラクター」とは何か 109

三一 「キャラ」とリアリティ 110

三二 『NANA』は「キャラ」は弱いけれど、「キャラクター」は立っている 128

三三 「キャラ」とは何か 140

三四 「キャラ」から見るマンガ史——『地底国の怪人』が隠蔽したもの 152

第四章 マンガのリアリティ 181

四―一 マンガにおける近代的リアリズムの獲得 182

四―二 「コマわり」とは何か 189

四―三 『新宝島』と「同一化技法」――竹内オサムが抱えたマンガの「近代」 200

四―四 フレームの不確定性 241

四―五 映画のリアリズム、「同一化技法」ふたたび 250

四―六 少女マンガと「映画」ではないリアリズム 264

テヅカ・イズ・デッド——手塚治虫という「円環」の外で

五―一 手塚治虫という円環 300

五―二 より開かれたマンガ表現史へ 314

第五章 章末註 336

あとがき——マンガ・イズ・ノット・デッド 340

新書版あとがき 357

参考文献一覧 366

星海社

53



SEIKAISHA
SHINSHO

テヅカ・イズ・デッド——ひらかれたマンガ表現論へ

伊藤剛

日本のマンガをめぐる言説は、「マンガの現在」を語り得ていない。そのため、少なくともここ一五年ほどのマンガは、あたかもマンガ史「以後」の空白に置かれているように見えていた。本書は、そうした状況へのいらだちから始められている。だが、「歴史の空白」にみえる事態は、その実「マンガ表現史」それ自体の不在を意味している。

「マンガ表現史の不在」には、必ず理由がある。それは、マンガ表現それ自体に埋め込まれたものだ。よって、本書の関心は必然的にマンガ表現そのものの解析と、そのためのモデルの構築に向かった。結果として見えてきたのは、手塚治虫を「起源」とすることで成立した「戦後まんが」という枠組みそれ自体が、表現史を書かせなくしているという構造であった。

本書は、マンガをさまざまな表現行為のひとつとしてとらえ、そこに内在するメカニズムを見ようとしている。個々の作品や作家についての言及も含まれるが、全体としては、表現そのものを見通すことのできる視点や方法の提示を目標とした。書誌の集積や作品論の蓄積

からだけでは得られないものを志向している。少しでも、「マンガ」という表現を理解する際の助けになるものを展開しようという試みである。

ここでは、マンガの話しかされていない。だがそうすることによって、逆に他の表現行為や学問分野、社会的な事象と接続する回路が開かれると考えている。マンガというジャンルに深く潜り、マンガのことを考え続けた過程と結果には、他の表現行為——美術や文学、映画や、ポピュラーミュージックや、もつと他のもの——との接点が随所にあらわれているはずだ。だから、本書は独立した「マンガ批評」として読まれることを期待している。と同時に、マンガという場所から表現や文化一般を考えることのできるものとなることも願っている。その意味では、誰に読まれてもいい。

本書は、全体で五章構成となっている。

第一章は、八〇年代後半以降から現在に至るマンガをめぐる言説の問題についての文章からなる。マンガという表現に言及するには、それをめぐる言説の問題に触れることは避けられず、またその言説の問題を通して表現の変化が見えてくると考えられるためである。ここでは主に、従来からの「マンガ評論」が、八〇年代後半以降のマンガ表現と乖離していることについて検証を行っている。ここで語られている言説の諸問題は、一見すると「マンガ評

論」という、ひどく小さな、ローカルな世界での事象に見えるかもしれない。しかし、そこにもまた、もっと大きな、戦後日本の言説史、サブカルチャー史の問題につながるものがある。その意味で、必ずしも局限されたものではないだろう。

第二章では、八〇年代後半にマンガに起こったと思われる決定的な変化を指摘し、その意味について考察を加えた。第一章で問題としてとりあげた「マンガはつまらなくなった」「衰退した」言説を、変化を乗り越えられなかったことの徴候としてとらえ、その「切断線」を越える営みと、「切断線」がどのように見出されたかという考察を通じ、マンガ表現をシステム論的にみるスキーマを提示している。

第三章では、マンガという表現を、その必須構成要素である「キャラクター」という観点を軸に分析を試みている。それは、まったく端緒についたばかりで、ほんの入り口を示しているにすぎない。しかし、裏を返せば、この議論からは、たいへん大きな領域が開けているものと考えている。「キャラクター」とは、私たちにとってとても親しみやすく、かつ論理的にはとらえにくいものだ。その「とらえにくさ」こそが、これから私たちが新しく思考する領域の存在を指し示している。

そして、第四章と第五章では、より大きなマンガ表現史へと言説を開くことを目標に、マンガにおける「リアリティ」のありようを手がかりにした議論を行っている。とはいえ、そ

ここで参照している、先行して研究や分析の成果を持つ諸分野、たとえば文学や映画理論についての私の理解は、せいぜい初学者というレベルのものである。その意味では、本書は批評書・研究書としては「よちよち歩き」のものかもしれない。だが、よちよち歩きならばよちよち歩きなりに、できるだけ遠くまで、真っ直ぐ歩いていこうとした。

ゆえに私は、できるかぎり「マンガ」という表現に深く潜り、つねに「マンガ」から思考するように心がけた。だから、当然のことながら、本書がマンガを愛好するひとに読まれ、マンガについて考える際の助けになることも望んでいる。さらにマンガ以外の文化研究などさまざまな分野で、本書での論考が参照されるのであれば、それは望外の喜びである。

本書は同時に、マンガに関わる実践の理論化の過程でもある。それは私自身の「読み」を普遍へと開いていく営みに他ならない。マンガを描くことを仕事にしてきたなかで、マンガ家を目指す学生の指導の現場で、あるいはマンガ編集の現場で、「マンガ」という表現の仕組みを分析的に言語化する機会が繰り返し訪れてきたことの帰結でもある。

こと教育の現場に立つようになってからは、マンガ読書体験を共有し得ない、八〇年代以降に生まれた学生たちに「マンガとは」という解説をすることを強いられている。そのことが、私の思考をより分析的なものにし、関心を個々の作品よりも「マンガ」という表現総体に向かわせるに至った。

本書で展開している、マンガ表現のシステム論的な解析は、実作や編集の現場で、何となく共有されていることに寄り添った理論化を常に意識して行われた。それはちやうど、自然科学者にとってのフィールドワークと、室内実験による追試、そして、それらの結果をうけて提唱されるモデルにたとえられるだろう。私にとってのフィールドとは「マンガ」という制作の現場や私自身の読書体験（より正確には、その読書体験のうちに生起した諸々の心理作用）であり、作品それ自体や、人々の「読み」を示す言説群は「自然」を知るための標本や測定結果と位置づけられる。

もつともここでいう「フィールドワーク」も「自然」もたとえに過ぎず、たとえば社会学でいう「フィールドワーク」とはまた別の位相にある。私は、分析対象を主に「書／描かれたもの」に限っており、たとえばあらためて読者にインタビューを行うといった方法での参与観察はほぼ行っていない。さらに、私自身の言説もまた、発表された瞬間から、すでにあるマンガをめぐる言説群や「語り」のなかに組み込まれていく。よって、自分だけの特権的に「観察者」と位置づけることは許されない。そのことは注記しておきたい。

もつとも、そのような誤解を招くおそれがあるにもかかわらず、あえてこうした「たとえ」を持ち出すのには理由がある。ここでいう「自然」とは、大きなシステムとして、広く「環境」ととらえられるものの比喩である。つまり、個々の作家や作品を評価するにしても、そ

れに先行する、あるいは同時代に展開されている他のマンガ作品群、そして他メディアのそれ……といった「環境」との対応、もっと強い言葉を用いれば「適応」の形態として評価するという態度、そのような評価軸の存在を主張したのである。

こうしたことは、私の知る限り、「マンガ評論」においては本格的には展開されてこなかった。一方、ここ一二年のブログを中心にしたウェブでのマンガへの言及を見てみれば、暗黙のうちにではあるが、このようなモデルに基づいた言説はたやすく見いだすことができる。むしろ、それは出版媒体における「マンガ評論」の側に決定的に欠けていたものといえるだろう。むしろ先行する仕事、とりわけ「マンガ表現論」にはすでに一定の達成がある。本書はそれらの成果のうえに拠^よっている。

目次

まえがき 3

第一章 変化するマンガ、機能しないマンガ言説 15

- 一 一 なぜマンガ言説は、現状に対応できないのか？ 16
- 一 二 「読み」の多様さとシステム論的分析の必要性 23
- 一 三 マーケット分類とジャンル分類のあいだ 28
- 一 四 『少年ガンガン』に見る言説の断絶 34
- 一 五 誰が子供マンガを「殺した」のか 39
- 一 六 キャラクター表現空間のなかで 45